

聖書:ルカの福音書2章41～52節

説教:わたしは自分の父の家にいる

はじめに

あけましておめでとうございます。

のっけからにねくれた話をしますが、私が子どもの時、正月が来るたびにこう思っていました。「12月31日から日付が一日進むだけで、世の中がなにも変わるわけでもないのに、どうして大人はお正月が来ると大騒ぎするのだろう。」いまは少し分かります。あのわざわいとしか思えないような一年をリセットして、今年こそよい年を迎えたい。一年の始まりの正月、新たな気分切り換えていこう。そんな意味はあるかもしれません。

実は、聖書で正月に相当するのが今日の箇所にもある「過越の祭り」になります。過越の祭りが近づくと、村中のひとたちがこぞってエルサレムの宮にお参りに出かけます。普段の畑仕事や家畜の世話などから解放されて、一年に一度の気分転換、休息という意味もあったようです。その過越の祭りのとき、十二歳になられたイエスが行方不明になるという事件が起きます。なぜイエスは行方不明になるのか。そこにはどんな意味が込められていたのか。ともに考えてまいります。

1 イエスを見失う両親

1) 過越の祭りとは

そもそもの過越の祭りはどのように始まったのか。モーセがエジプトで苦しむイスラエルの民を率いられて脱出するときまでさかのぼります。出エジプト記12章2節で主はモーセと彼の兄アロンに、「この月をあなたがたの月の始まりとし、これをあなたがたの年の最初の月とせよ」と語り、その後羊をほふって家の門柱とかもいに血を塗ること、羊を食べること、種なしパンを作ってそれを食べ、脱出に備えることなどの細かい指示が続きます。その夜、主のわざわいによってエジプトのすべての長子と家畜の初子が死ぬこととなります。けれども、血を塗った家は過ぎ越していつて助かり、無事にエジプトを脱出した。これが過越の祭り謂われです。このことに加えて神は、この過越の日を新年の始まりとするようにと言われましたので、いまで言えば3月から4月、ちょうどイースターの時期が聖書の正月に相当します。

2) エルサレムにとどまる

さてヨセフとマリアが、祭りの期間をエルサレムで過ごしてから村の人たちと一緒に帰るときに事件が起きました。大人は大人、子どもたちは少し大きな子どもが年下の面倒を見るというようにして分かれて歩いていたのでしょうか。気がつくといエスの姿が見当たりません。子どもたちに聞くとエルサレムを出発するときからイエスの姿はなかったという。これは大変、すぐにエルサレムにとって返して探し回ります。そうすると宮で教師たちの真ん中に座った小学生のイエスが、聖書の専門家を前にして難しい話しをして教えていた。両親はその様子を見て驚く。

3) 「どうしてわたしを捜したのか」

イエスは両親に黙ってエルサレムに居残りしたのですから、「どうしてこんなことをしたのです」とマリアが厳しく叱るのは当然でしょう。それに対するイエスの答えはまったく意外なものでした。49節「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」

マリアが「どうしてこんなことをしたのですか」と理由を聞いているのに、イエスの方が逆に「どうしてわたしを捜されたのですか」と理由を聞き返します。これではどちらが親でどちらが子どもかわからない。開き直りなのでしょうか。まさかそんなはずはありません。では、これをどう理解したらよいのでしょうか。

4) 両親は理解できなかった

子どもがこんな口答えをしたら、普通の親なら頭を叩かかせて、「親に向かってなんという口をきくのですか」言って、厳しくしかるところでしょう。ところが、マリアはさすが選ばれた母親だけあります。「これらのことをみな、心に留めておいた。」なにか深い意味があるのではないかと。マリアは考え続けます。

2 イエスのことば

1) 自分の父の家にいる

イエスの口から出ることばは、人の知恵ではなく神の知恵ですから何か大切な意味がありそうです。49節にあることばを二つに分けて考えてみましょう。「わたしが自分の父の家にいるのは当然

です。」と「ご存じなかったのですか。」この二つ。

まず前半のほうから。ここで一つ確認しておくことがあります。皆さんの聖書で「父の家」のところに米印がついていて、欄外に別訳が記されていて、「父の者たちの間に」とか「父のみわぎのうち」とも訳されるとあって、ここをどう訳すか少し難しい箇所であることを示しています。いずれの訳をとるにしても、中心にあるのは、イエスはいつも父と一緒にられる、そういうことだけは確実に言えます。

しかしそれだけでは、ではどうしてイエスはエルサレムの宮にとどまっていたのか、はっきりしません。イエスは宮にしようがいまいが、どこにいてもいつも父と一緒にいることができるからです。でもイエスは「いるのは当然です」と言って、かなり強力な理由があってエルサレムにとどまっています。

2) ご存じなかったのですか

ダメ押しするように「ご存じなかったのですか」とまで付け加えています。このような言い方は、だれもが知っている情報なのに、あなただけが知らないのか、驚きと、時にはちょっとした軽蔑を含めて使うこともあります。もちろんイエスは両親を軽蔑することはありませんから、ここは驚きというのではなく、いまは理解できないかもしれないけれど、いずれだれもがわかるようになります、そのような意味で語っているように思います。でもそれはいつなのでしょう。そしてそれはどんな意味だったのでしょうか。

3) なぜ両親に黙っていたのか

この箇所をよく読んでみると、不思議なことがもう一つあります。どうしてイエスは両親に黙ってエルサレムにとどまったのだろうか。うっかり親に言うのを忘れていたとか、親に反抗して困らせてやろうとか、ではない。この方のなさることにはすべて神の知恵が満ちていますから、親が心配するとわかりながら、それでも親に伝えなかったことに、なにか深い理由があるはずです。

3 謎解き

1) 過越の祭り十字架

どこから考えるか。このとき過越の祭りの時期であったことがヒントになります。最初にも確認したように、過越の祭りはもともと神がモーセを通じてイスラエルに命じたもので、エジプトの苦し

みからイスラエルがどのように救われたかを目に見える形にして、それを毎年正月になると繰り返して、子孫が記憶できるようにさせたものです。イエスの時代、モーセの出エジプトのできごとからおよそ千五百年も経っていますから、過越の祭りはほとんど習慣になってくる。

でもイエスは過越の祭りの本当の意味を知っています。過越の祭りは、やがて与えられる本物の救いをかたどったモデルです。ということは本物があるということになる。私たちは、それがイエス・キリストの十字架であることを知っています。過越の祭りは、イエスの十字架の前触れ、さきがけ、象徴です。その本物の過越の祭りは、イエスが成人され、およそ三十歳になられたときに成し遂げられてまいります。

イエスがエルサレムに入られたのはいつであったか。過越の祭りの時です。最後晩餐と呼ばれる食事、あれは過越の食事でした。その食事の後、イエスは逮捕され、裁判にかけられます。ポンテをピラトが、イエスではなくて強盗であったバラバを釈放したのも、過越の祭りのときに一人を釈放する習わしがあったからでした。イエスはそのようにして過越の祭りの時、十字架につけられ、父なる神の救いのご計画を全うされます。

イエスが「自分の父の家にいるのは当然である」と語った意味は何か。この方が自分の父の家にいるのであれば、父のみこころに従って十字架につくのも当然のこと。

2) 人を巻き込むことができない

最後に残された疑問。なぜイエスは両親に告げずにエルサレムに残ったのか。父が定められた救いのご計画を成し遂げるのは、だれなのか。いうまでもなくイエス・キリストです。他の人に代わってもらうことはできません。あるいは他の人に手伝ってもらうこともできません。先ほど言ったように、イエスがご自分の父の家にとどまることは、この方が死ななければならないことを意味していました。もしそのことを両親に告げたらどうなるでしょう。両親もイエスの死に巻き込んでしまうかもしれないのです。それは絶対にあってはなりません。そうならないようにと、あえてイエスは冷たいような、不親切なような態度をおとりになります。たとえ両親が戸惑ったとしても、教えることはできません。

過越の祭りの時、少年であったイエスは突然いなくなります。マリアは最初、その意味が理解できませんでしたが、ずっと考え続けます。でも、やが

てイエスが十字架におつきになるのを見た時、イエスがどれほどに両親に配慮してあのようなことをされらのかを、はっきりと理解することになります。

新しい年を迎えても、なお私たちは不安の中に置かれています。救いは本当にあるのかと、誰もが不安の中で過ごしています。なぜこのようなことが、どうして、私たちにも分からないことがたくさんあります。でもやがてマリアが十字架を前にして、神のみこころを知っていったように、私たちも知る 때가来ます。いまは暗闇でも、光を見たときに、あの暗闇にどのような意味があったのかを教えてくださいることになります。期待し、待ち望みつつ、この一年をイエスとともに歩んでまいります。